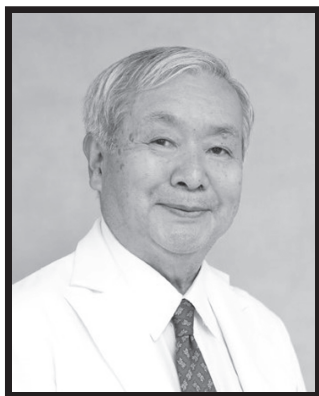


秋葉 隆先生を送る



秋葉 隆先生

7月初めのとてつもなく暑いが続いたなかで開催された第67回日本透析医学会（JSDT）学術集会で、安藤亮一先生が講演し秋葉 隆先生が司会されるはずであった教育講演「感染対策」において、秋葉先生が時間までに会場においでにならなかった、との情報は後になってから知りました。それは先生が急逝されたとのJSDTや日本腎臓学会、日本透析医会からのメール連絡を受けた後のことでありました。にわかには信じ難いことでありましたが、以前に心臓弁膜症で手術を受けられたことや、数年前に軽い脳梗塞で仕事を休まれたことが、ふと頭をよぎりました。

数年前に東京女子医科大学の血液浄化療法科の教授を定年退任されたとはいえ、私よりも若い享年71歳とのことでありました。

先生とお付き合いが始まったのは考えればかなり古いことでした。故中川成之輔先生が東京医科歯科大学の透析グループの中心的存在であった頃に、秋葉先生は中川先生の直弟子的な存在で、いつも中川先生の側にお見かけしました。それはわが師である故平澤由平先生が出席するいろんな会合に、田舎者の私がカバン持ちで参加していた頃から感じていたことでありました。実のところ平澤先生も中川先生も共に新潟出身の方であったことから、お二人の仲は

とくに親密でありましたので、私と秋葉先生の間でも自然とお付き合いが始まりました。そして先生のご尊父は仕事柄で全国を転勤されたとのことで、小学生の頃には私の故郷の山形でも暮らしたことがあることもわかり、いつしか秋葉先生とお付き合いも深いものとなっていました。新潟の「越乃寒梅」が飲みたい、とのご希望で、何度かご自宅にお送りしたことを思い出します。

中川先生が闘病の末に亡くなられてから後には、東京医科歯科大学の教授に戻られた故丸茂文昭先生の懐刀的な存在で活躍され、その後の米国留学から戻られ、さらには太田和夫先生が亡くなられた後の東京女子医科大学の血液浄化療法科を引き継がれ、学会の中心的存在としてご活躍されましたことは、周知の事実であります。

ほかでも先生とご一緒に活動したことは、日本ハイパフォーマンス・メンブレン（HPM）研究会の立ち上げ、経口ビタミンDパルス療法とそれに対応する透析液のCa濃度の検討、月刊誌「臨牀透析」の編集委員会、日本透析医会の研修委員会など多々思い出されます。

3年前の10月には熊本市での日本透析医会の秋期セミナーには研修委員として参加されました。その際に、偶然に熊本空港のロビーで一緒になり、先生は昼飯がまだだから「ステーキ昼食」を食べると言うので、食べ終わるまでお待ちしたことが思い出されます。そのときには、脳梗塞からすっかり回復されて気力も体力も以前のバイタリティ溢れる先生に戻ったなあ、と感じたものでありました。このように昔のことや最近のことなどを種々思い出しますと、すべてが懐かしいことばかりであります。

それにしても、人の死と常に向き合っている仕事柄とはいえ、71歳での旅立ちはあまりにも早く、悲しく残念なことであります。先生のご冥福をお祈りしつつ、ここに謹んで送別の辞を申し上げます。

鈴木 正司（信楽園病院）